

# ネパールにおける学校体育の現状と課題

——カトマンズ盆地を中心として——

清水利佳

## 要旨

本稿は、発展途上国であるネパール、その中でも特にカトマンズ盆地を中心として、学校体育の現状を理解するとともに、教育を取り巻く環境を調査し、今後ネパールにおける学校体育がどうあるべきかを考察する。

This study investigates the present state of physical fitness education in the Katmandu basin area of Nepal, taking into account the challenges faced within the primary and secondary educational environments including recommendations for future consideration.

## 1. はじめに

### (1) ネパールの概要

ネパールは、北はヒマラヤ山脈で中国と、南側はタライと言われる平原でインドと国境を接している内陸国であり、港や特別な資源を持たない。国土は北緯26度から30度、東経80度から88度に位置し、緯度としては日本の奄美諸島あたりに位置し、亜熱帯地方である。東西の長さは約850 km、南北は約180 kmで、面積は約14万 km<sup>2</sup>あり、日本の4割に満たない小さな王国である。海拔はタライ平原の60 mからエベレストの8,842 mまでの大変起伏に富んだ地形で、約80%が山岳丘陵地帯である。首都カトマンズは、海拔1,300 mの盆地の内にある。人口は約2,500万人で多民族、多言語国家でもある。憲法においてヒンズー国家であると規定しているように、人口の90%がヒンズー教徒であり、5%が仏教徒、イスラム教徒は数%である。文字はヒンディ語と同様のデヴァナーガリー文字であり、国語はインド・アーリア語系のネパール語である。

ネパールの一人当たりの国民総所得 GNI は、1,450米ドルであり、日本の27,430米ドルと比較すると20分の1程度で、後発発展途上国に分類され、最貧国の一つとして挙げられている。

また、出生時の平均余命は、男性の60.1歳に対して、女性は59.6歳であり、5歳未満児死亡

率（出生千対）は男性が91，女性が106であり，保健衛生・健康問題が重大な政策課題となっている。

気候は亜熱帯らしく，雨季と乾季がある。雨季は6～9月で，近年毎年洪水に襲われており，その原因は森林破壊であると言われているが，地球温暖化もあり，簡単には原因が特定できない。人口増加も著しく都市，特にカトマンズの環境汚染が深刻な問題となっている。

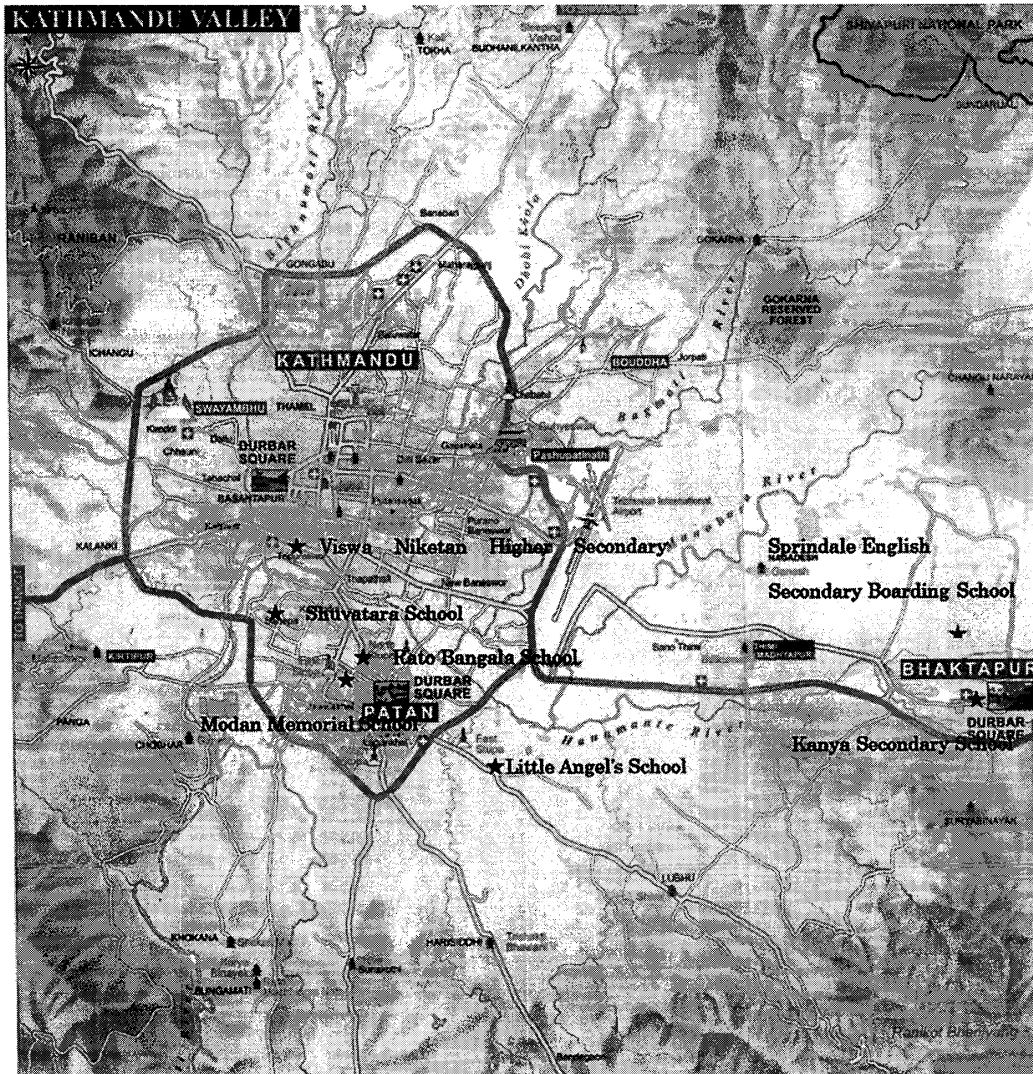
ネパール経済は，自然条件に左右される農業が中心である。人口の8割以上が農業で生計を立てている。工業は精米，食品加工など農業に関連したものが多く，極めて脆弱である。従来からネパールでは，観光収入や雇用兵（いわゆる，グルカ兵）による送金や年金および出稼ぎ者による送金収入，外国無償援助などで貿易赤字をカバーし，経常収支の悪化を防いできたが，近年は赤字が急増している。

近年のネパール情勢を見ると，1951年にトリブヴァン国王による王政復古は鎖国を廃し，近代国家建設の一步となった。59年に初めて総選挙が実施され民選内閣が誕生した。しかしその後，いわゆる王様クーデターにより政党が非合法化され，90年になってネパール全土で民主化運動が起こり，91年に32年ぶりに総選挙が実施された。その後の政権は不安定で，1年も持たない状況のなか，2001年6月に王室での銃乱射事件が発生した。それは皇太子によるもので，国王や王族が多数死傷した。前国王の弟でもある新国王の評判は芳しくなく，一層事態の混乱を招いた。その後の政権も不安定で，十数年前より台頭してきたマオイスト（マオバディ，毛沢東主義者，過激派と称される）が現在，大きな政治勢力を持つに至った。政府内の汚職がはびこり，信頼されない政府や貧富の格差拡大に伴い民衆の中にマオイスト礼賛が根付いていった。この集団は，2000年より顕著に反政府活動を活発化させ，西ネパール地方の一部では「人民政府」も樹立したと誇っている。最近では，首都カトマンズにまで影響を及ぼし始めている。時折，政府との停戦に合意するのだが，どちらか一方が破る状況である。これらの小競り合いが国内治安にとって大きな不安要素であり，外貨獲得の目玉である海外からの観光客の大幅減少を招いている。

近年，人々の暮らしも大きく変わってきた。都会ではかなり豊かになってきたようであり，ファッションも伝統的なものから新しいものへと変化している。都市と地方の生活格差も一層拡大している。「カトマンズはネパールではない」とよく言われるが，地方を歩くとそのように実感できると言われている。マオイストと軍隊の衝突が，現実に治安を著しく悪化させており，ネパールの政治や経済並びに国民生活に大きな影響を与えている。

## (2) 調査方法及び目的

今回の調査方法は，ネパールの中でも比較的恵まれた環境にあるカトマンズ盆地内（カトマンズ，パタン，バクタプル）の学校を中心に，電話による聞き取り調査及び，2004年8月の現地視察調査によるものである。ネパールでは，学校教育における体育だけでなく，国民の生活



訪問した学校の所在地

の中での運動（スポーツ）がどのような状況におかれているのか、そこでは何が求められているのかを把握するために、簡単なアンケート調査も実施した。

調査の目的は、現在のネパール（当該地域）における学校体育の現状や、ネパールの学校で体育の担当教員が、今後体育教育をどのような方向に移行しようと考えているのかを理解することである。また、ネパールの人々は地域での体力作りをどのように認識しているのかを含め、ネパールにおける体育について、今後の課題を検討する。

## 2. ネパールの教育制度とその変遷

### (1) 現在の教育制度

ネパールの教育は、英国の影響を大幅に受けている。それは、ネパール人が第一次世界大戦

(1914～1918年)においてグルカ兵として英国に協力したことで、英国がネパールに対して大変好意的であったことや、英国の政治的な影響力も大きかったためである。ネパールでは、英国との関係上、英語を使う必要性に迫られ、1940年代に少数ではあるが学校を設立した。しかし、学校に通える児童は限られており、識字率は20%にとどまっていた。本当に教育の重要性を国家全体として考え始めたのは、1世紀にわたり首相の座を保持し続けたラナ政権が崩壊した1950年以降であった。1951年から、近代的な学校制度が整備され、その後も幾度にわたり教育制度の見直しが行われた。1971年にそれまでの5-3-2制が、3-4-3制に変更された。1981年には5-2-3制に、そして1993年には現在の5-3-2制に改変された。現在のネパールの学校制度は次のようになっている(図1参照)。1～5年の初等教育を『小学校』(Primary School)、6～8年の前期中等教育を『中学校』(Lower Secondary School)、9～10年の中期中等教育を『高等学校』(Secondary School)としている。生徒は高等学校を卒業しても、外国の大学には入学資格がないので(多くの大学は入学までに12年間の学歴が必要)、国内の大学に少なくとも2年間は在学しなければならない状態であった。それゆえ、近年政府の教育改革により、11年～12年の後期中等教育(Higher Secondary School)を設け、12年間の学校教育に移行してきている。さらに、学年暦も2月～12月であったものが改められ、4月開始で翌年3月までの3学期制になった。(なお、ネパールの教育制度については、以下の論文を参照した。畠博之「ネパールのカースト/エスニック・グループ間の教育格差とその要因に関する実証的研究」<http://www.page.sannet.ne.jp/t-hata/roki/edu-rep/thes2-00.htm>)

現在、小学校及び中学校を修了した段階で郡統一試験を受け、高等学校(10年の課程)を終えた段階で、ネパール教育省による全国統一試験SLC(School Leaving Certificate)と呼ばれる中等教育修了資格試験を受けなければならない。これは高等学校卒業認定試験でもあり、大学入学試験でもある。700点満点で、420点以上をFirst Division、315点～419点をSecond Division、224点～314点をThird Divisionと呼び、ここまでが合格である。700点の32%、すなわち224点を下回ると不合格となる。この成績によって、入学を許可される大学が決まる。

急激な教育の普及は、全国的な統一性や教育の具体的内容まで細かに検討されていないため、学校格差や地域格差も大きく、教員の教育指導レベルが追いつかなかったことや、学校施設の不足など多くの問題を顕在化させた。現在、小・中・高等学校あわせて全国で約15,000校、教員数は7万人ほどである。もっとも、学校とはいっても校舎のない青空教室もあるし、教員も兼業であったりして、必ずしもすべてが常勤というわけではない。

『UNFPA 世界人口白書2003』によると、ネパールの初等教育就学率は、男子128%、女子100%(ネパールでは、入学年齢に達していない満6歳以前に入学する児童や、学籍を置いたまま他校へ移る児童がいるため)であり、初等教育の最終学年まで修了する児童の割合は、男子70%、女子42%である。中等教育就学率は、男子56%、女子38%である。これらは、発展途上国の中でも低位のレベルにある。また、15歳以上の識字率は、男性59%、女性24%であり、と

年齢	学年	教育制度	
17	12	後期中等教育 Higher Secondary Education	※ SLC (全国統一試験)
16	11		
15	10	中期中等教育 (高等学校) Secondary Education	
14	9		
13	8	郡統一試験	
12	7	前期中等教育 (中学校) Lower Secondary Education	
11	6		
10	5	郡統一試験	
9	4	初等教育 (小学校) Primary Education	
8	3		
7	2		
6	1		

※ SLC (全国統一試験) は、10年課程修了後、合格するまで何年でも受験可能

図1 ネパールの学校制度

りわけ女子の識字率が極度に低いのが特徴である。女子生徒が男子生徒に対して、入学率も卒業率も低いのは、ネパール人家庭の貧困に由来することが多い。両親は子供を労働力としてみなしているため、できるだけ早く退学させるのである。ネパールでの良妻の評価基準は、熟練労働者であって教育レベルではない。今でも女子の教育不要論が深く根付いている。

ネパールの学校は、政府が認定している政府校と私立校に分類される。授業料やカリキュラム内容にも相当の差があるため、裕福な家庭では私立校に通わせるのが一般的である。また、国内情勢が思わしくないため、子どもを小学生時代から海外に留学させる保護者も少なからずいるようである。子供の将来を考え、多少の無理をしてでも私立校に通わせる親も多いが、その継続が困難となり、中途退学をさせて政府校へ再入学させるということも珍しくない。政府校と私立校の格差が存在することから、それぞれに通う子供に与える影響も大きく変わってくると思われる。現在、小学校教育の義務教育化が検討されている。

## (2) 体育の位置付け

ネパールの政府校は、小学校教育以外体育が存在しないのが実態であり、学校によって独自にカリキュラムを変更することもできない。中学校以上になると衛生学の授業は開講しているが、運動は休み時間を利用して実施しており、生徒本人の自覚のみに任されている学校も多い。

私立校は、教科科目も様々な特色がある。私立校における体育の授業を見学すると、実技に関する体育は政府校よりもはるかに進んでいる。子供を私立校に通学させる保護者の多くは、

児童の健康，特に運動量に対する関心が非常に高い。裕福な家庭の子供は，塾通いやテレビゲームに忙しく，家庭での運動不足が懸念されることがその理由としてあげられる。私立校は，経営の問題もあるため保護者の意向を無視できない。私立校を経営するオーナーの考え方一つでカリキュラムや教育方針に差が生じることは，文部科学省の基準を設けている日本の教育とまったく異なると今回の調査の中で実感した。

### 3. ネパールにおける体育教員の現状

かつての教育の量的拡大期には教員確保のため，アンダー SLC と呼ばれる低資格教員が大量に採用された。しかし，その後教員訓練プログラム等による教員の質的向上への努力が行われ，1989年に小学校教員全体の11.4%いた低資格教員は，1998年には全体の3.5%に減っている。しかもそのうちの67.3%が教員訓練を受講済みであり，全小学校教員の訓練受講率46.4%より高い。現在では，ネパールにおける小学校の教員資格は，SLC 試験に合格することを条件としている。

ただし，体育に関しては SLC 試験に合格すること以外に特別な資格等はなく，普通の教育課程修了後，教育省による体育教育トレーニングを受けた教員が担当するのが一般的である。大学で経済学を学んだ教員が，教育トレーニングを受けて体育教員として勤務するなど，専門的な教育を長期間受けていないのが現状である。政府校においては，スポーツで活躍した卒業生が，教育プログラムを受け母校の体育を担当することもある。体育の授業内容に関して，学校内の体育担当者会議もなければ，他の学校との交流もなく，教員間で議論され検討される機会が殆どないのが実態である。今回，名門といわれる私立校にも調査に伺ったが，それぞれのスポーツで好成績を残した者が，それぞれの種目のみの指導をするのが普通と考えられ，他の種目との間では，指導方法や評価方法について，学校内部であっても議論する場は設けられていない様子であった。教員の考え方も，種目が違えばお互い理解できないという認識であろう。他校の教員との交流の場は，交流試合または各種目の地区大会であり，同一種目の教員に限られていると考えられる。今回視察した学校の体育教員から，現在のあり方を変えていく意志はあまり感じられず，体育はあくまで健康を考え，体を鍛練する場であり，それ以上でもそれ以下でもないという意識がうかがえる。それらは，スポーツを推進して生徒の技術を向上させても，経済力に結びつかず，活躍する場もないネパールの国内事情に起因するものと思われる。

### 4. 体育授業の現状

表1に示したとおり，政府校と私立校では学校の設備等に相当の差があり，体育の教員数，活動する時間，種目など明らかに格差が見られる。表1に含まれていない学校を含めて，学校

見学を実施した具体例をいくつか挙げてみることにする。

## (1) 政府校の場合

### ① Modan Memorial School

女子校であり、本年開学50年を迎える。パタンにあり、交通の便などの立地条件は非常に良く、この地区においては、恵まれた広大な敷地を持つ学校の一つである。全校生徒750名、教員数は35名である。小学生低学年が36名クラスで、上級生になるほどクラスの人数は多く、最高65名のクラスまである。

31年前からスポーツを始め、現在体育の授業は衛生学をあわせると週に3回あり、小学生には体操とバスケットボールやバレーボールの基本を教える。グラウンドも非常に広く恵まれているが、頻繁に使用しているようには感じられず、維持管理も充分に行われていなかった。校長も、グラウンドの一部を企業などに貸すことで収益を得て、それを教育に投資したいが、勉強する環境を考えると、敷地内に部外者が多く出入りする状況になるため、グラウンドを貸与すべきか否かを悩んでいた。優秀な生徒もたくさんいるが、経済的に貧しい家庭の子供が多く、継続して教育を受けることも困難な状態の家庭も少なくないようである。

学校では制服を設けている。それは、もし制服を廃止した場合、着替えもままならない状態の生徒もいるからかもしれない。写真①は小学5年生の体育を見学した際に撮影したものだが、太鼓の号令で、ラジオ体操に類似したものを行っていた。この体操は、バスケットゴールなどの施設を寄付してくれた日本のNGO関係者に指導を受けたようである。授業を受ける服装は、体操服に着替えることなく制服のままであった。

校内の様々な施設を見学したが、児童を通わせるどの家庭も制服を格安で購入できるように、学校が安く大量に生地を購入し、教員が中学生以上の生徒を指導して、校内の施設を使用し縫製していることがわかった。

授業以外でのスポーツへの取り組みは、教員の専門もあり、バレーボールに大変力を入れており、近隣の学校を集めて、50周年記念大会を開催する予定であると伺った。

### ② Viswa Niketan Higher Secondary School

パタンにあり、小学生から12年生まで、体育は一人の教員が担当していた。1～3年までは、空き時間及び昼休みに運動させ、4～8年生は、毎週金曜日にクラブの時間が設けてあり、運動に限らず、この時間に様々な活動を行う。運動クラブとしては、サッカー、クリケット（ソフトボールにも似たスポーツ）、バレーボールがある。過去においては、マラソンを含む陸上競技も行われていた。9～12年（10年を修了した者は、SLC試験を受ける権利を得るが12年修了まで受けない者もいる）までは、全国統一試験SLCのための勉強が優先され、運動は空き時間を利用して、生徒個人の自由にまかせていた。

この学校には、水泳種目でオリンピックに出場した卒業生がいたけれども、オリンピック自

表1 2003年度

学校名	Vishwa Niketan Higher Secondary School			Bijiya Memorial High School			Vidyarthi Niketan Secondary School			Kanya Secondary School		
公私の別 (最高学年)	政府校 (12年)			政府校 (10年)			政府校 (10年)			政府校 (10年)		
地区	カトマンズ			カトマンズ			バクタプル			バクタプル		
学年	1~5	6~8	9~10	1~5	6~8	9~10	1~5	6~8	9~10	1~5	6~8	9~10
生徒数	390	299	603	462	338	256	209	251	114	58	124	43
授業料 単位 Rs	入学金 600	入学金 1800	入学金 2000	入学金 800	入学金 1000	入学金 1200	なし	管理費 400	管理費 500	入学金 375	入学金 450	入学金 600
体育科目	体育	体育と 衛生学	なし	衛生学	なし	なし	体育	体育と 衛生学	なし	体育と 衛生学	衛生学	なし
体育教員数	1			0			0			1		
体育の 目的	健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように			健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように			健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように			健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように		
体育の 授業方法	週に4回			なし			授業終了後生徒だけで自由に活動する			授業終了後毎日		
体育の 授業内容	サッカー・バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・マラソン・クリケット			サッカー・卓球・バドミントン			サッカー・バレーボール・卓球・バドミントン・マラソン			サッカー・バレーボール・バスケットボール・バドミントン・マラソン		
体育施設 (屋外)	サッカーグラウンド			サッカーグラウンド			サッカーグラウンド			小規模運動場2カ所		
体育施設 (屋内)	卓球台・バドミントンコート・バレーボールコート			卓球台・バドミントンコート			なし			なし		

体の認知度は、全生徒の4分の1程度であり、学校内であまり関心がない状況であった。

## (2) 私立校の場合

### ① Rato Bangala School

開学12年目で、2005年3月にはじめて高等学校+2年生課程の卒業生を出す新設校ではあるが、建物は古い。授業料も月額5000 Rs (Rsとはネパール・ルピーのことで、1 Rsは2004年8月現在1.53円)であり、この学校の教員の給与が月額3,000~5,000 Rs程度であると考え、その授業料は非常に高額である。各学年に1クラスで60名しか入学させないため、教育が丁寧という評判もあり、大変人気のある学校である。外交官や外国資本の会社に勤務する外国人家庭の子どもも多く、授業は、ネパール語(国語)の授業以外は全て英語で教育されている。

専任の体育教員は1名で、大学で経済学を専攻し、大学卒業後、体育の教育トレーニングを



学校別状況

Springdale English Secondary Boarding School			Arnapurna Higher Secondary School			Mount Sinai Boarding School		Little Angel's School		
私立校 (10年)			私立校 (12年)			私立校 (8年)		私立校 (10年)		
バクタプル			カトマンズ			カトマンズ		パタン郊外		
1~5	6~8	9~10	1~5	6~8	9~10	1~5	6~8	1~5	6~8	9~10
130	49	39	427	304	216	171	42	1748	2717	500
入学金 1635	入学金 1745	入学金 1975	300	400	500	450	550	925	1050	1750
体育	体育と 衛生学	なし	体育	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
2			0			1		48		
健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように			健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように			健康、精神的にも体力的にも丈夫に育つように		教育の一部である。精神的体力的発達と規則正しい生活を送れるようにする		
週に2回			クラブ活動として授業終了後に週1回			クラブ活動として授業終了後に週2回		必修科目(クラブ)として授業終了後に週4回行うが、ギターや音楽などスポーツでないものも含まれる		
サッカー・バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・マラソン・クリケット			卓球・バドミントン			サッカー・バレーボール・バスケットボール・卓球		サッカー・バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・マラソン・クリケット・硬式テニス・水泳・ボクシング・ウス・ダンス		
小規模運動場			広場			広場		サッカーグラウンド・クリケット場・バレーボールコート2面・バスケットコート2面・テニスコート2面・プール大人用・プール子供用		
なし			なし			なし		卓球室 (11台)・ボクシング練習場・ウス練習場・ダンス室2・トレーニング室		

聞き取り調査により著者が作成

受け、現在に至っている。男性教師であり、体育の中でも特に球技を担当しており、その他ダンスなどの指導は、非常勤教諭が3名であたっている。小学1年生と5年生の体育を見学したが、どちらもバスケットボールの授業で、1年生はパスやドリブルなどの基礎練習、5年生はゲーム形式で、男女に分けて行っていた。日本における体育の授業方法とよく似ており、準備体操→軽いランニング→階段の昇降トレーニング→ドリブルシュート→ゲーム形式→整理体操という順に組み立てられていた。写真②は、笛の号令に合わせ、階段の昇降トレーニングを撮影したものである。

この学校に通う児童や生徒の多くは、放課後も塾や家庭教師などにより勉強する時間が長いことがあげられ、自宅においてもテレビを見る時間やコンピュータゲームをする時間が多いと思われる。保護者から、勉学についてはもちろんであるが、子供の運動不足を懸念し、体育教育を重視する声が多い。そのため体育の授業は、健康維持のための基礎体力をつけることは勿



写真① Modan Memorial School 5年生の体育



写真② Roto Bangala School 5年生の体育

論のこと、肥満傾向にある日常的な運動不足の子供に対しても、より積極的に運動させるよう工夫している。

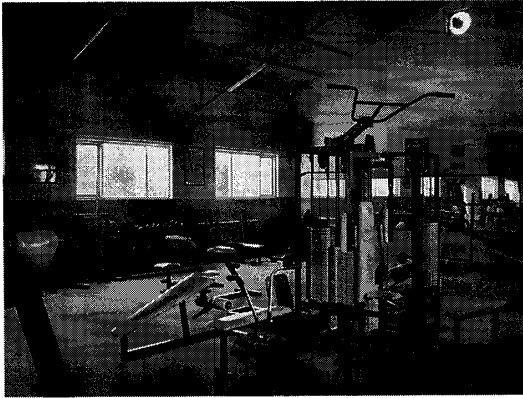
服装については、写真でもわかるとおり体操服に着替えており、より活動的であった。ただし、クラブ活動に関しては、1学年60名という少人数教育であり、塾に通う子供も多いことから、活発とはいえない状況であった。

## ② Little Angel's School

開学23年でパタン郊外にあり、ネパールにおける私立校の中でも伝統のある学校である。男女とも寮を持ち、3名の医師が連携して全校生徒5,000名程の健康管理を行っている。特に寮生に対しては、24時間病気やけがに対応している。

今回訪問した学校の中では、1番規模の大きな学校であり、生徒数、敷地の広さ、設備の全てにおいて恵まれていた。野外施設は大人用と子供用のプール、サッカー場、テニスコート2面、バスケットコート2面、バレーボールコート2面があり、現在クリケット場を造成中であつた。また室内施設は、卓球場、ダンス場、空手、テコンドー、ウス（格闘技の一種）などの道場がある。その他にも、写真③のとおり日本の会員制トレーニングジムを思わせる程充実したトレーニング施設があり、専属の教員1名が終日指導にあたっていた。

体育授業のあり方は、日本における小学校の必修クラブを思わせるもので、授業終了後の週4日、全生徒が何らかの種目を選択して（学年途中での変更は原則として認めない）参加する形態をとっている。今回中学1年生の授業を見学したが、まず学年600名程の生徒がバスケットコートに集合し、一斉に教員の太鼓の号令で体操を行う。体操は、軍隊経験のある教員が担当し、整列指導の後、学校独自の体操（他の教員の話では軍隊で行う体操に近い）を行っていた。1学年全生徒による体操終了後、生徒は各種目に別れて活動する。この時間を担当する教員は48名で、専門の種目を担当する。この時間の中には、スポーツ種目に限らず、音楽関係や美術関係の活動も入っている。従って、選択した種目により、1年間体操以外全く運動を行わない生徒も存在する。



写真③ Little Angle's School のトレーニング室  
(常時専門の方1名が在中している)



写真④ Shuvatara School 体育館  
(現在は新校舎建設中のため食堂として利用)

生徒は、学校で決められた体操服を着用していた。上は男女とも同じポロシャツ型のものであったが、下は男子が綿の長ズボン、女子は膝より長い丈のキュロットスカートであった。女子は、運動する時に、非常に動きにくそうであった。

クラブ活動は、バスケットボールとクリケットが活発で、格闘技系の種目は男子に特に人気があるようだ。プールの設備を持った学校は他に殆どないこともあり、国内水泳のトップクラスの選手が卒業生を含め数多くいるようである。

### ③ Shuvatara School

パタンの少し町はずれにあり、落ち着いた街並みの学校であるが、敷地が大変狭い。全校生徒700名規模の学校である。訪れた日が休校であったため、生徒の活動を見ることはできなかったが、体育教員へのインタビューと学内施設の見学をすることができた。

体育教員は専任5名、非常勤3名である。現在校舎の増築工事にともない、バスケットコートが資材置き場として使われ、写真④のように体育館を食堂として使用しているため、体育の授業を行う条件としては不適切であったが、その代わりに、活動場所として近隣のスポーツ施設を借りていた。また、朝礼で全員が体操を行うなど、日常の学校生活の中に体育教育を取り入れるなど、十分配慮している印象を受けた。クラブ活動にも大変力を入れており、特にバスケットボールにおいては海外遠征を考えている様子であった。日本の高校生と交換試合など、積極的な希望もあった。この学校には、社会的地位があり比較的高収入の保護者の子供が多く通っている。ネパールの社会情勢が不安定なことから、安定した外国への海外遠征や留学などを希望する保護者も多いようだ。クラブ活動は、木曜日以外毎日行われており、休日も午前中に活動している。バスケットボール以外に、サッカー、バドミントン、バレーボール、卓球、水泳などがあり、専任教員が指導している。その他にも非常勤教員の指導により、空手、テコンドー、ウスなどの格闘技も行われている。

教育は、国語にあたるネパール語以外の教科は全て英語で行っており、授業料は月額3,000 Rs とやや高額であるが、教員の指導は大変きめ細かく行われていると感じた。

### (3) Bhaktapur (バクタプル) 地区の場合

バクタプルは、カトマンズから東へ15 kmほど離れた町で、道路や建物のほとんどが赤茶色のレンガ造りのような中世の古い街並みそのまま残っている。別名「バドガオン（信仰の町）」とも呼ばれており、カトマンズやパタンと同様に、カトマンズ盆地内の代表的な古都である。人口22万人ほどの小さな町であり、住民の8割以上が農業に従事している。すばらしい建築物や彫刻を見ることができ、その中でもチャング・ナラヤンという古い寺院は世界遺産に登録され、街並み全体が文化財として保護されている。

#### ① Kanya Secondary School (政府校)

今にも崩れそうな古い街並みの中にある女子校である。全校生徒も225名ほどで、敷地も小さく運動する施設はほとんどない。経済的に貧しい農業従事の保護者が多く、労働力として子供を必要としているため、継続して通学させることが困難であったり、無理をして私立校に通わせていた子供を中途退学させ、改めて入学させたり、学校としても生徒数が一定しない状態にある。この地域では、カトマンズやパタンに比べて、姉弟の数も多く、水くみや家事全般において特に女性が働き手であるため、子供はある程度読み書きができるようになると、退学させて家事を手伝わせる保護者も多い。子供に教育が必要であることは保護者には十分認識されているが、生活のためには退学はやむを得ないとする部分も大きい。地域的な特徴及び女子校としての上記の特徴も顕著に見られる。

体育についても、多くの情報を得ることはできなかったが、小学校低学年以外は各段階での統一試験に合格するための勉強が優先されるようである。

#### ② Sprindale English Secondary Boarding School (私立校)

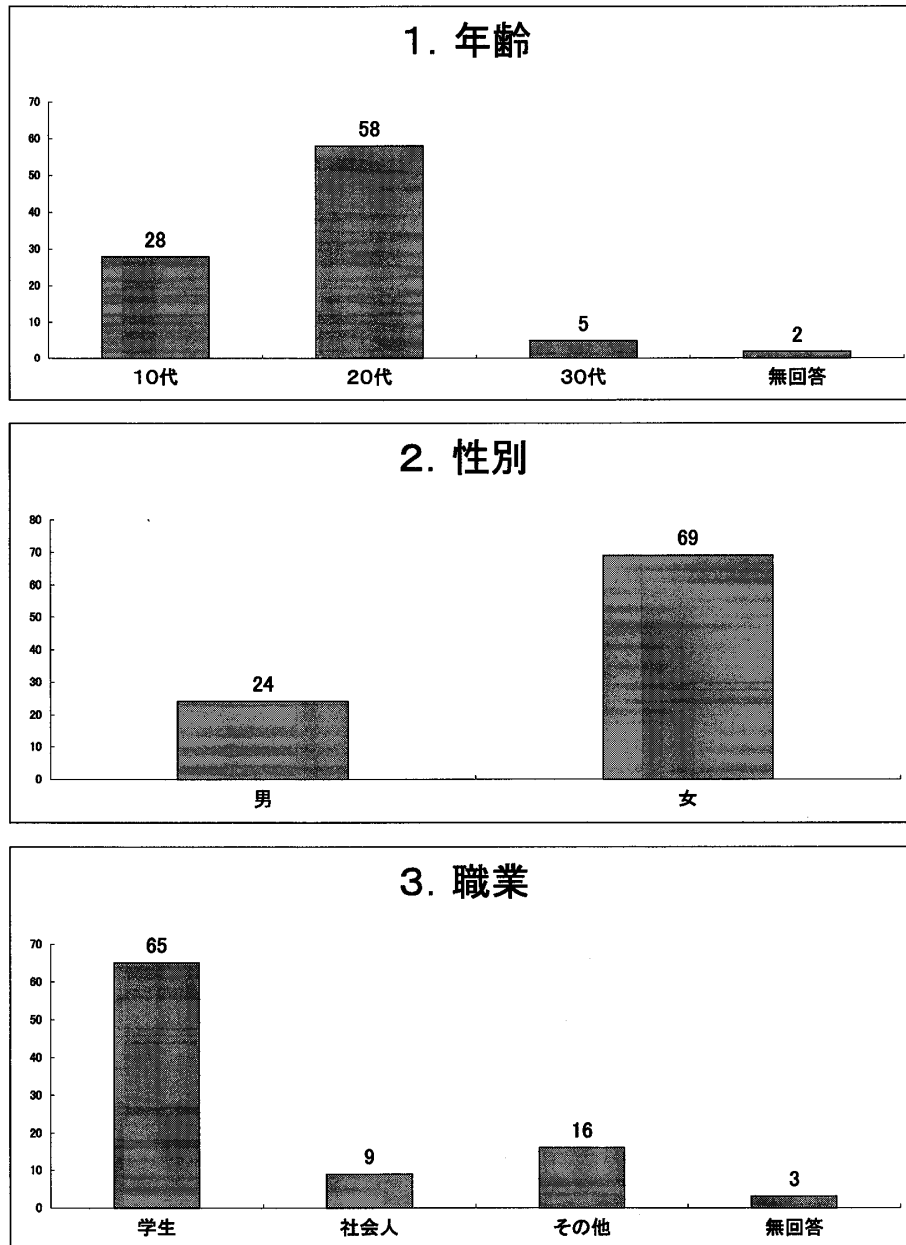
非常に敷地の狭い学校で、8×20m程しか運動する場所がなく、そこはまたスクールバスの車庫としても使用されている状態であり、体育に関する設備は不十分と言わざるを得ない。しかし、校長の体育教育への関心は非常に高いものがあつた。私立校であるにもかかわらず、入学金として小学校1,635 Rs, 中学校1,745 Rs, 高等学校1,975 Rsを支払えば、毎月の授業料は必要なく、比較的安価に入学できる。それは、農業従事者の保護者が多い地域に配慮したものと考えられる。この地域の中でも、子供の教育に熱心な保護者が多く、全国統一試験 SLC に合格させることが保護者の希望であるため、学校としてもそれに対応せざるを得ない状況であり、体育教育に理解を得ることは難しい。運動は労働の中で行っているという認識が強い。

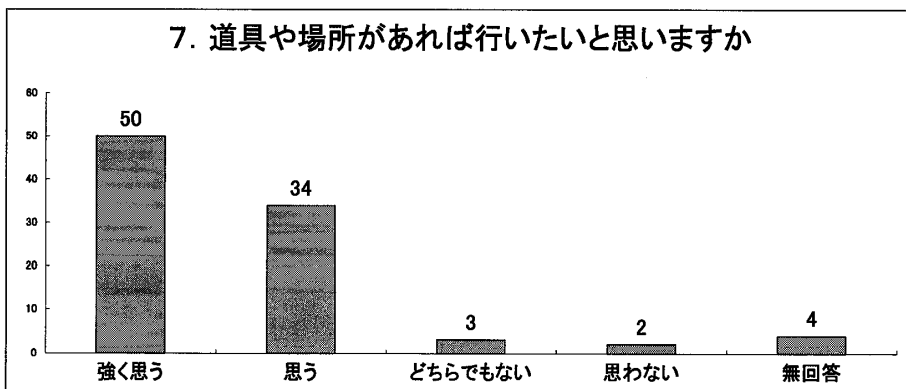
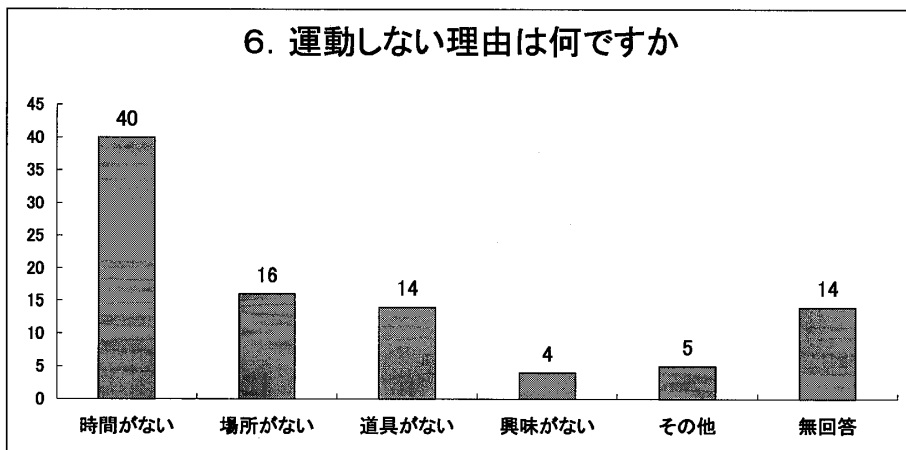
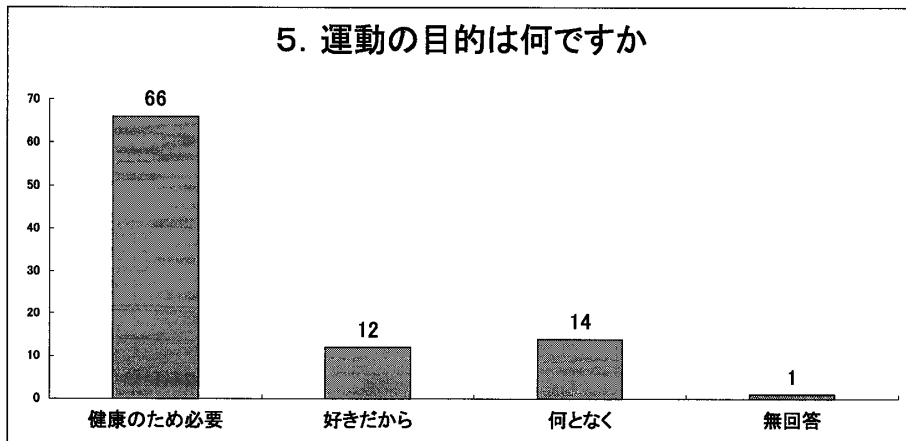
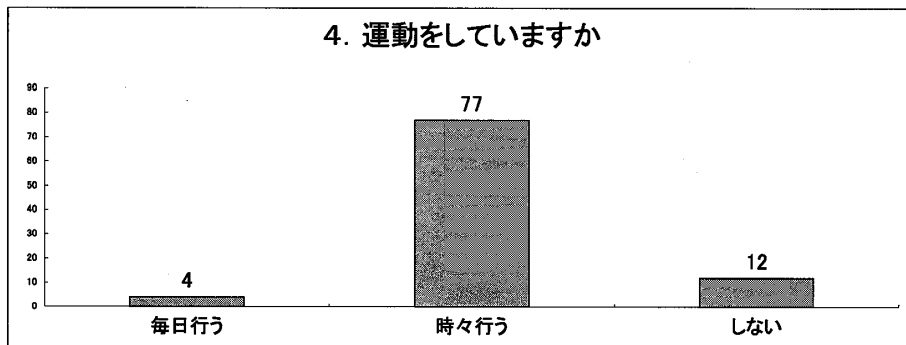
クラブ活動は、運動部としてサッカーや陸上競技に積極的に取り組んでおり、練習場所として休耕田や近くの空き地を利用していた。その他、コンピュータ教育に熱心に取り組んでおり、生徒がクラブ活動記録などの記事を掲載した学校新聞をコンピュータで制作しており、興味深いものであつた。

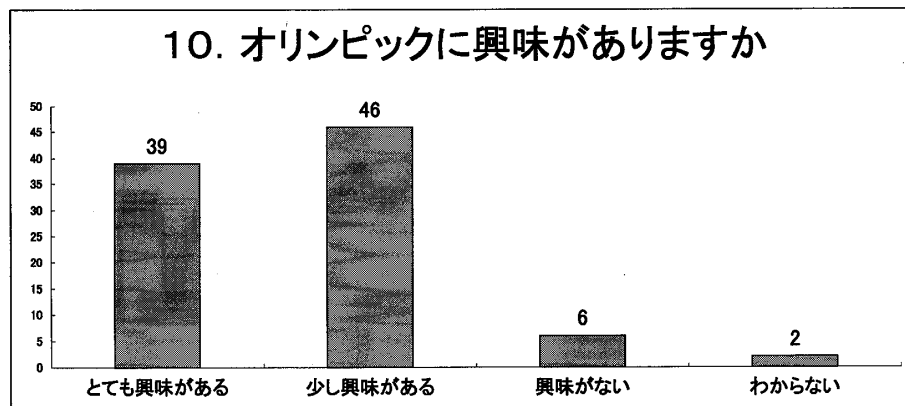
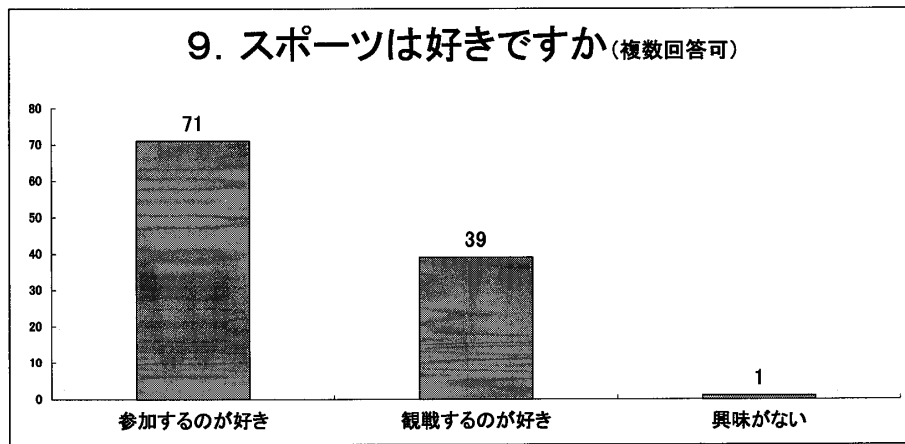
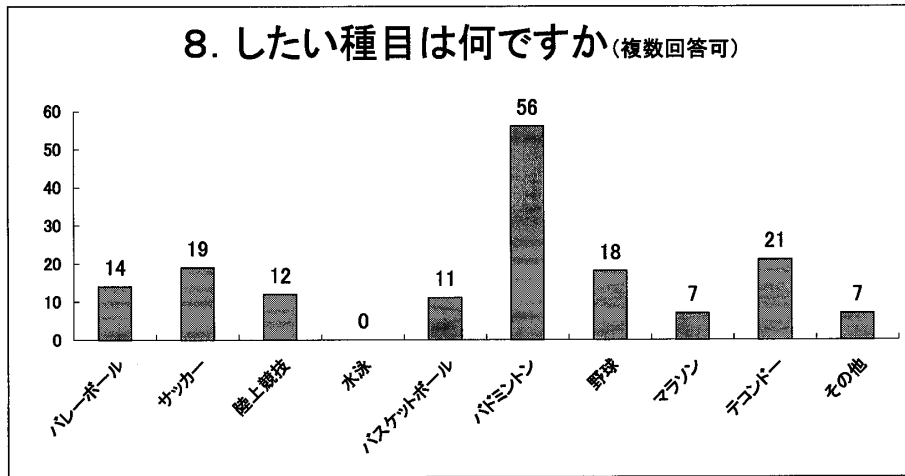
## 5. 社会での運動（スポーツ）の位置付け

学校教育を終えて、カトマンズやパタンで専門学校等に通う学生を中心に、簡単な運動に対するアンケート調査（総数93名）を行ったところ、以下のような結果を得た。ただし、調査対象の性別、年齢、職業に偏りが見られ、一般的なアンケート結果が得られたと断言することはできないと思われる。しかし、カトマンズ盆地で生活し、比較的若く積極的に社会と関わりを持とうとしている層の意見として理解することは可能ではないかと考えられる。アンケート結果は次のとおりである（グラフ参照）。

カトマンズ及びパタンで行ったアンケート結果







- ① 運動を毎日もしくは時々する人が全体の80%程度であり、その理由として、運動は健康を維持するために必要と考えられており、「好きだから」や「何となく」を大きく上回っている。
- ② 全体の95%以上の人々が、スポーツは（観戦を含め）好きであると答え、場所、用具、時間があれば参加する意志を持っている。
- ③ 参加したい種目として、バドミントン、テコンドー、サッカーなどに人気がある。それ

らは、体育教育に取り入れられている種目が多いことから、学校教育の延長線上にあると考えられる。また、手軽に行える種目であることもその理由にあげられる。

- ④ 学校見学の中で教員から聞いた生徒の意識とはかけ離れているが、オリンピック競技に興味がある人が全体の90%程度であった。2004年がオリンピック開催年であったことに加え、カトマンズやパタンではテレビが普及しており、新聞などの情報量も多いことから、そのような結果になったと思われる。

学校教育の中では、スポーツのレベルが高いとは決していえない状態であったが、アンケートに答えてくれた人の中には、レベルの高いスポーツを望む声もあり、全体としてスポーツに対する意識が低いものではなかった。ただし、場所や用具の確保は現実的に難しい問題であり、生活の中でスポーツを楽しむ時間も確保が難しい。カトマンズやパタンにおいても、限られた時間で水くみをするなど、特に女性は家事に費やす時間が多く、自由になる時間が少ないこともその要因であろう。

## 6. 今後の教育課題

今回の調査で多くの体育担当教員にインタビューする機会を得たが、ネパール教育の現状の中で、また、それぞれ学校のおかれた立場の中で、教育の質的向上のための工夫が、様々な面において行われていることが理解できた。ただし、予算面では、少数の学校を除き非常に厳しい状態であった。今回調査に協力いただいた政府校と私立校に分けて考えてみると、政府校に通わせている子供の保護者は低所得者が多く、識字率をあげる教育、生活のための教育、全国統一試験 SLC に合格するための教育が優先される。政府校はカリキュラムが決められているため、学校ごとに独自の教育方法を持たせることは難しい。また保護者の意識として、子供に最低限の教育を受けさせることだけを望み、教育を受けさせることにより労働力としての子供の時間を失うことをおそれている状況にある。その点、私立校に通わせる保護者は、比較的高収入であり、外交官を含む社会的地位の高い外国人家庭も多い。政府校がほとんどネパール語で教育するのに対し、私立校は国語であるネパール語以外の科目は英語で教育している。政府校に比べ、多彩なカリキュラムが組まれていること、さらにはコンピュータ教育に力を注いでいる点も私立校の特徴である。また、子供の運動不足を懸念する保護者が多く、学校への要望として子供の体力強化をあげ、健康面への関心が高いことも特徴としてあげられる。

インドと中国に挟まれ、政治面で他国の影響を多く受けるこの国では、まず生活や仕事のための教育が優先されることは自然な流れであるともいえるが、これまでに述べた点を考慮に入れたうえで、今後の体育教育の課題として当面最優先されるべき点は以下のように考えられる。

### 〈政府校の場合〉

まず、教育に携わる者全体で意識の統一をはかり、学校教育の義務教育化を国に対し要求し



ていくことが必要であると考え、既に小学校を義務教育にする意向は教育省内でも議論されているようであるが、早急に進めることが望まれる。その上で、専門的な体育教員を確保すること、運動施設及び用具の確保、体育教育に対する時間の確保へと発展の方向をつなげることができると考える。まずは義務教育化を図り、政府からある程度の予算を確保しなければ、学校現場で如何に努力をしても改善不可能な点も多い。政府校施設全体の老朽化が進み、安全面も危惧される。さらに、衛生管理面における指導の充実も必要であり、子供達の体格などを調査し、栄養面を含めた健康に対するケアも考えて行く必要がある。

#### 〈私立校の場合〉

専門的な体育教員の確保と、体育教育を積極的にカリキュラムへ組み入れること。私立校では、体育は日本でいうクラブ活動に属する考え方が根強く、体育・音楽・美術の教員が同じ時間に受け持つことが多い。その点を考えると、音楽や美術を希望する学生は、全く運動をしないことになってしまう。さらに体育の少人数教育（学校間格差が大きい）が望ましい。1度の視察であり、把握できていない部分も多いと思うが、柔軟体操やストレッチなど筋肉をケアする運動が、どの学校でもほとんど見ることができなかった。種目や学校を越えた意見交換や勉強の場も必要であると考え。運動施設及び用具のさらなる充実（ボール等の数が、生徒数に対して少なすぎる傾向にある）、授業内容を考えると、種目の技術を優先せず、必要な筋力強化の充実が適切であろう。また、前にも述べたように、筋肉のアフターケアも十分に注意すべきであろう。

以上から、ネパールにおける体育教育の分野は、子供達の生活習慣や健康の維持増進の分野と考えれば、専門種目だけにとどまらず、異なる種目や、他校との間に教員の交流の場を設け、講習会等を行い、情報交換をしていくことが望まれる。特にストレッチ、柔軟体操、基礎的な筋力トレーニング、運動後のケアなど、全種目にかかる基礎的な分野の充実を図っていくことが重要である。また、生活水準が高くない地域での衛生に関する教育の充実が求められる。まず病気を防ぐために、必要な衛生面や栄養面の教育、さらには運動の分野で防衛体力・基礎体力を付けることが先決であり、それから運動技術に移っていくべきである。低額な教育費の政府校でさえ継続して学校に通わせることのできない保護者の経済力が障害となり、国民の生活水準の向上と安定、そして子供達に十分な栄養を与えることのできる環境整備が大前提であり、その上に教育の議論があるのかもしれない。けれど、教育の充実を図らなければ生活水準も上がらず、現状のままでは悪循環に陥る。政府における早急な初等教育の義務化と学校に対する資金援助、そして国民の健康が最優先にされる教育意識になるよう希望して止まない。

## 参考文献

- 石井博編『アジア読本ネパール』河出書房新社, 1997年  
石井博編『もっと知りたいネパール』弘文堂, 1986年  
アジア経済研究所『アジア動向年報』1994年～2003年  
D. B. ビスタ著・田村真智子訳『ネパールの人びと』古今書院, 1993年  
山本真弓著『ネパールの暮らしと政治』中央公論社, 1993年  
トニー・ハーケン著町田靖治訳『ネパール』白水社, 1997年  
UNFPA『世界人口白書2003』財団法人家族計画国際協力財団(ジョイセフ), 2003年  
UNICEF『世界子ども白書2004』財団法人日本ユニセフ協会, 2004年  
ブラッドリー・メイヒューその他著『ロンリープラネットの自由旅行ガイド ネパール』メディアファクトリー, 2003年  
西澤憲一郎著『ネパールの社会構造と政治経済』勁草書房, 1987年  
マヘシC. レグミ著・蓮見順子訳『一九世紀のネパールの農業社会』明石書店, 1998年  
島博之「ネパールのカースト/エスニック・グループ間の教育格差とその要因に関する実証的研究」  
<http://www.page.sannet.ne.jp/t-hata/roki/edu-rep/thes2-00.htm>

## 追記

本稿の執筆に際し、ネパール事情に精通されている鈴鹿国際大学教育文化研究所次長(元鈴鹿国際大学学務部長)戸室誠一先生から貴重なご助言を幾度となくいただき、心から感謝申し上げます。更に、ネパールでの調査に快く応じてくださった政府校や私立校の多くの先生方、授業見学に協力してくれた生徒の皆さん、多くの学校の情報収集や現地取材並びに視察見学を実施するにあたり学校とのアポイントメントをとり、更には通訳やアンケート調査実施を引き受けて下さったルーザートレーニングセンター所長アルチャナ・シュレスタ女史、ネパールでの現地調査に通訳として同行し保護者としての意見も聞かせてくださったラジェンドラ・サキヤ氏にも心から感謝いたします。

(Physical Fitness Education, 体育)